

飯城勇三氏のアンケート回答（Queenom89より抜粋）

01.「初読」の感想

「あべこべ」に結びつけるエラリーの推理にわくわくした。（略）

02「再読」の感想

再読するたびに評価は低くなる。（略）しかし、何度再読しても、相変わらず、「妙に面白い」。
なぜだろう。（略）

03.「チャイナ蜜柑の秘密」を以下の点から評価してください。（各項目 10 点満点。10 点の基準はこれまで読んで来たミステリ作品で、10 点と思えるものと比較して点数をつけてください。）

プロット＝（6），サスペンス＝（5），解決＝（7），文章＝（7），パズル性（論理性）＝（8），感動・余韻＝（5）

04.あなたがもっとも好きな（印象深い）キャラクターと場面と台詞

キャラ：ジェームズ・オズボーン

アイドルが自分を見て微笑んだだけで「彼女は俺に惚れているんだ」と勘違いしてストーカーをするオタク的な人物に思えた。

場面＝（エラリーとアイリン・リュースの対決シーン）

「青年探偵と美貌の女犯罪者の対決」というのは、実にわくわくする。

台詞＝（ラストのテンブル嬢のセリフ）

我々読者は、以前の作品で「意味がなさそうなものに意味を見いだす」エラリーの姿を何度も見ているのだから、「なにもありません。あの男はおなかですいていたのだという以外」は、ないですよ。ひょっとして、これもまた、「あべこべ」なのだろうか。「あべこべの密室」，「あべこべの手掛かり」，そして「（いつもと違う）あべこべの推理」。作中人物にこんなツッコミをさせるということは、クイーンは確信犯だったに違いない。

05.ダネイがお気に入り作品の一つとして「チャイナ」を挙げたのはなぜだと思いますか？

「チャイナ」に見られる変なところは、間違いなくダネイの発想だろう。しかしリーはこういう発想はあまり好んでいなかったらしい。つまり、ダネイが本作品を気に入っているのはリーの抵抗に打ち勝って自分の好みを前面的に押し出せたから。では、なぜリーが一步引いたかということ、
「シヤム」での「山火事が迫る中での殺人」というアイデアと全編に漂う緊張感、双子の少年の魅力的な描写から、ダイニングメッセージのアイデア以外をリーが主導権を握って書き進めたからと思える。マンネリ打破のため二人がそれぞれ自分の好みを全面的に押し出した作品が「シヤム」と「チャイナ」だったのかもしれない。（「災厄の町」と「靴に棲む老婆」もそうかもしれない。）

ホストのあれこれ

01.「チャイナ蜜柑の秘密」を読んだ感想

○今回の読書会に向けて3回読了。計5回目読了。これまでのエラリーの活躍はヒーロー的に

思えていましたが、本作品では道化師のようなイメージに。小栗虫太郎の法水麟太郎ものや、アントニー・パークリーのシェリングムものを思い出しました。個人的には暴走する推理が好きなので、本作品のエラリーの暴走ぶりに興奮しました（符号に対する執着と推理。そして窃盗と不法侵入）。初読時は密室の意味や推理に感心して面白く読んだ記憶があります。ただ、再読してみるとおかしなところが多々見られるようになりました。しかし、Queendom「チャイナ」特集と法月綸太郎氏の「笠井潔論（大量死と密室）」を繙くと、本作品の違った魅力がいくつも見えてきました。

飯城さんの「妙に面白い」という感想には、同感であります。

○違った魅力とは何なのか？ 本格ミステリとしての瑕疵は置いて、作家としてのクイーンの変遷をたどる上で本作品は、ターニングポイントになっていることがQueendom「チャイナ」特集から読み取ることができました。クイーンはルイス・キャロルが好きで、その嚆矢となったのが本作品で有り、「アリス」三部作、「チャイナ」「キ印ぞろいのお茶会」「神の灯」が作られたと考えられています。「チャイナ」に瑕疵があった分、「キ印」「神」と改善されていく様子もわかります。「チャイナ」は長編向きではなかっただろうという意見もあり、クイーン自身それを感じて、アリス三部作の後ろの2作を短、中編としたのかもしれませんが。その三部作を順に追って読むと、かなり面白いです。是非！（※1参照）

また、ライツヴィル作品以後の作品で見られるエラリーの暴走推理（奇妙な論理）の片鱗がここから始まったとも思われます。

○違った魅力その2。笠井潔はミステリが生まれた理由として、「人類が初めて体験した大量殺戮戦争である第一次大戦と、その結果として生じた膨大な屍体の山が、ポーによるミステリー詩学による極端化をもたらしたのである。戦場の現代的な大量死の体験は、もはや過去のものかもしれない尊厳ある、固有の人間の死を、フィクションとして復権させるように強いた。

機関銃や毒ガスで大量殺戮され、血みどろの肉屑と化した塹壕の死者に比較して、本格ミステリーの死者は、二重の光輪に飾られた選ばれた死者である。犯人による、巧緻をきわめた犯行計画という第一の光輪、それを解明する探偵の、精緻きわまりない推理という第二の光輪。第一次大戦後の読者が本格ミステリーを熱狂的に歓迎したのは、現代的な匿名な死の必然性に、それが虚構的にせよ渾身の力で抵抗していたからではないか。」（「新本格」派に若者の支持／朝日新聞92年9月1日付夕刊）と語り、この時代に生まれたミステリーを「大戦間探偵小説」と論じています。この「大戦間探偵小説」とは「長編本格推理の黄金時代」（※2参照 ヴァン・ダイン「探偵小説ゲーム論」や「フェアプレイの原則」で象徴した「謎—論理的解明」を基本構造とする形式主義的な探偵小説）のことと考えると法月綸太郎は補足しています。そして、法月は自身の評論「大量死と密室」の中で、「チャイナ」が「大戦間探偵小説」の時代に有りながらも、「大戦間探偵小説」に疑問を感じて「無名の被害者」と「トリック成立のために死体をモノ化してあつかう」ことを行い、「大戦間探偵小説」を超えた荒涼とした光景を見せ、ミステリーを新たな地点へと向かわせたのではないかと語っています。クイーンファンとして鼻息荒く首肯してしまいます。また、他の登場人物の記号化も他作品を凌駕しているとも思われました。

○初読が創元推理文庫版で、その見開き紹介文も、とても魅力的だったことを覚えています。ですが、これは密室大集合のアンケート結果とともに「むっ」とうなってしまふところがありました。以下紹介文。

「宝石と切手収集家として著名な出版業者の待合室で、身元不明の男が殺されていた。しかも驚くべきことには、被害者の着衣をはじめ、その部屋の家具も何もかも、動かせるものすべて”さかさま”にひっくり返してあった。この”あべこべ”殺人の意味は何を意味するのか？ 犯人はなんの必要があって、すべてのものをあべこべにしたのだろうか？ ニューヨーク・タイムズはクイーン最大の傑作と激賞したが、事実、国名シリーズの中でも卓抜した密室殺人事件として、特異の地位を占める名作である。」

事務室、待合室が死体によって「密室」を作られたことがわかると犯人がわかる仕組みになっているので、この紹介文とアンケートはいかがなものかと思っていました。ですが Queendom と法月の評論から、「チャイナ」の密室は、これまでの密室を扱った作品とは違って、犯人を閉じ込めるもので、作品とリンクした「あべこべの密室」と思えるようになりました。「チャイナ」そのものが、ミステリに対して”あべこべ”を提示し、ミステリを次の段階、より深淵へと導くマイルストーンの一つだったのかもしれませんが。

02.「チャイナ蜜柑の秘密」の点数。

プロット＝（８）「魅力的な謎の提示を評価してです」、サスペンス＝（５）「ちょっとつかみどころのないユーモアの方が横溢していたので。ルイス・キャロルの「アリス」シリーズを意識指定のでしょうかね。」、解決＝（８）、文章＝（８）、パズル性（論理性）＝（８）、感動・余韻＝（９）「作品だけではなく、Queendom「チャイナ」特集と法月綸太郎「大量死と密室」も繙いた感銘から。」

03.あなたがもっとも好きなキャラクターと場面と台詞

キャラ：フェリックス・バーン「最近、嫌われる人物の行動について興味があり、つい魅力を感じてしまいます。でも、対した役どころではなかったですね。やっぱり暴走推理するエラリーですかね。」

場面＝P324～P330。「読者への挑戦まえはワクワクしてしまいます。そしてロバート・ブラウニングの詩が入ってきたことにも。」

台詞＝「あの蜜柑色の切手のことですよ。実のところ、あまりに魅力あふれる偶然の一致なので、いつかぼくが哀れなオズボーンと優しい顔の中国の伝道師の事件を小説化することになったら、”チャイナ蜜柑の秘密”という題名をつける誘惑に勝てそうもありません！」（これまで、題名に冠された手掛かりには、必ず意味を持たせてきたクイーンが、（本の主題、あべこべを意識して？）意味を持たせず、ただ題名につなげるエピソードにしたので、この台詞を選びました。）

04.ダネイがお気に入り作品の一つとして「チャイナ」を挙げたのはなぜだと思いますか？

○「なんて、ぼくは、すごい謎と解決を思いついたんだろう。そして、あべこべで全てやり遂げれば、これまでの形式化されたミステリを変え、新しいミステリを作れるかもしれないぞ」と思い、実際そうできたからではないでしょうか。ちなみにダネイの自選ベストは「チャイナ蜜柑の秘密」「中途の家」「災厄の町」「九尾の猫」「キ印ぞろいのお茶会」「エイブラハム・リンカンの鍵」です。（法月綸太郎の「大量死と密室」の中では「九尾の猫」についても触れられています。この作品とのつながりの評論も面白い！ 読みたい方は、本書とエラリー・クイーン「九尾の猫」、笠井潔「矢吹駆シリーズ」、G・K・チェスタトン「折れた剣」、アガサ・クリステイ「ABC殺人事件」、S・S・ヴァン・ダイン「僧正殺人事件」を読んでからじゃないと後悔します。）

○ちなみにEQFCでのアンケートの平均点は、（2010/2~6）以下のようでありました。プロットサスペンス解決文章論理性感動・余韻平均点 6.75.66.56.26.95.6（※1参照）

「キ印ぞろいのお茶会」『江戸川乱歩編世界短編傑作集 4』創元推理文庫に収録。

「いかれ帽子屋のお茶会」『世界の名探偵コレクション』集英社文庫に収録。

「マッド・ティー・パーティー」『神の灯』嶋中文庫に収録。

「神の灯」『エラリー・クイーンの新冒険』創元推理文庫に収録。

「神の灯」『神の灯』嶋中文庫に収録。

（※2参照）

小説世界から社会的テーマや人間の内面的な位相を消去することで、フェアで知的な論理ゲーム空間を構築することにあつた。「項」と「項」を論理的に組み合わせて作る論理式のような作品こそが目指すべき理想像と考えられていました。

余談

○クイーンはルイス・キャロルだけではなく、ルーシー・モード・モンゴメリも読んでいてブラウニングの詩を引用したのではないかと思います。なぜなら、エラリーのヒロインとして登場する女性は、赤毛である場合が多く見られるからです。（ニッキー・ポーターは作品によって髪の色が赤毛であったり、とび色であったり、ブロンドになったりしています。長編では赤なのでモンゴメリ作品の主人公のイメージがあつて、それが投影された可能性が、あるのではないのでしょうか。）

○前回の読書会でも触れていますが、今回もあえて触れさせていただきます。映画監督のデヴィット・リンチがクイーン作品の影響を受けていると妄想しています。今回の「チャイナ」は、リンチ作品の「ツイン・ピークス」とリンクする部分が多くあるように思いました。それは、「暴走推理の探偵」「あべこべの部屋（ブラック・ロッジとホワイト・ロッジ）」「奇妙な人々の事件と、関係ありそうでなさそうなエピソード」等です。物語の根幹をなす部分なので、たった3つじゃないかとは、言わないでくださいね。2017年には、「ツイン・ピークス」の新シリーズが始まります。興味のある方は是非ご覧いただければと思います。（本当に毎回、デヴィ

ット・リンチについて、しつこくてすみません。)